

# イニシアティヴ 海外渡航報告書

小林奈央子

比較人文学 博士後期課程

## 今回の海外渡航の目的：

人文学フィールドワーカー養成プログラムに関わる阿部泰郎教授の研究・調査団の一員として、イギリスおよびアイルランドで日本宗教のワークショップ、図書館所蔵稀少資料閲覧、奈良絵本国際会議参加、遺跡・遺構の実地調査などをおこなう。

渡航期間 平成20年3月16日～平成20年3月25日

## 1. ロンドン大学 School of Oriental and African Studies (SOAS) にて発表

今回のワークショップは、ロンドン大学 SOAS 日本宗教研究センター (CSJR) と名古屋大学との共催により、3月17、18日の2日間にわたり、「春季国際ワークショップ」として開催された (Spring International Workshop)。ワークショップのタイトルは、Researching Japanese Religions: New Findings from Fieldwork and Archives (「日本宗教の研究——フィールドワークと古文書からの新発見——」) であり<sup>1)</sup>、私は、日本宗教の「フィールドワーク」調査からの成果として、The Oza Ritual of the Ontake Practitioners (御嶽行者の御座儀礼) と題し、御嶽信仰における神降ろし儀礼である御座について初日に発表した。内容は、各地の山岳信仰が衰退・消滅していくなか、御嶽信仰がいまなお継承されている大きな理由として「霊神信仰」を挙げ、その霊神信仰を支える中心的な柱としての御座儀礼を紹介した。おそらく、御嶽信仰に関する昨今の現状が国外で発表されるのはこれが最初であるため、入門的な部分も含んだ調査報告とした。私自身、SOAS の日本宗教学修士課程の第一期卒業生でもあり、2日間にわたる大会でチェアを務めた Dr. Lucia Dolce は当時の指導教官でもある。そのためより一層の思い入れと準備で臨んだ。しかし、7年ぶりの訪英で、英語での発表と質疑応答がうまくいか渡航前は非常に不安であった。

大会には、SOAS の日本宗教専攻の修士課程と博士課程の学生、OB/OG、他学科で日本宗教に興味を持

つ学生、そしてイギリス在住の日本宗教研究者などが集まり、まさしく国際的な研究集会となった。しかし、その多くが、英語圏以外からの出身者であり、私の拙い英語力にも理解を示して下さり、大変救われた。また、パワーポイントを用いての発表と、最後に御座儀礼の模様を VTR で流したことにより視覚的な補完ができたことで、英語にもかかわらず発表内容はだいたい理解して頂けたようである。

今回 Discussant として参加された関守ゲイノー先生は、2001年から昨年まで東京大学で山岳信仰研究について教鞭をとっておられ、日本では度々お会いしていた。今回は私の発表のコメントータをして下さり、以下の点をご指摘いただいた。

御嶽信仰は、非常に社会的な文脈でも捉えられ、また、個人的な文脈でも捉えられる。また、家族の幸福を祈るなど現世利益的な側面を多分にもっている。死者のレベル、行者のレベルなど様々なレベルが相互に関係しているが、死者との関係は (心情的な点でも) 大事であり、それは、今回のワークショップで現代日本のキリスト教者の先祖供養の事例を報告した Satomi Horiuchi 氏の発表とも重なる部分がある。ヨーロッパ人にも同じような死者を悼む感覚はあり、meditation などの考えた方でもヨーロッパのキリスト教に共通するものがある。今後は様々なレベルで文脈化することにより、新しい視点が見えてくるのではないか、ということである。

他の発表者からの報告にも示唆的なものがいくつかあった。私のすぐ後に発表した Tullio Lobett 氏の発表は、御嶽行者が holy person (聖人) の1つとして挙げられ、在家の者が荒行に直接参加することで sacred (聖) な世界と secular (俗) な世界をつないでいるという旨の内容であった。また、関わりは薄いように思える現代キリスト教者の中にも、表向きに発せられる言葉とは裏腹に祖先を祀りたいという、信仰とは違った次元での心情的な思いがあることが前出の Horiuchi 氏の発表でわかった。また、Mano Shinya 氏の栄西と覚鑊のつながりを指摘する発表は、問題点も



発表を行う三好俊徳氏（名古屋大学大学院博士後期課程）

多いようではあるが、その中で扱った五輪九字明秘密  
 釈は、修験道や御嶽信仰の行法集などにも類似するよ  
 うなものがあ、大変興味を持った。

第1日目の午前中は、Dr. Dolce の案内により、  
 British Library の所蔵本の閲覧を特別にさせて頂いた。  
 阿部先生がかねてよりご興味を持たれていた「大職  
 冠」の写本など数点を拝見させて頂いた。写された時  
 代の違いなどもあり1つ1つの写本にさまざまな相違  
 が見られ、大変興味深かった。全体的なテーマは一貫  
 していても、最後に海女の妻が自らの胸を切り裂いて  
 玉を入れるシーンがあるものや無いものなど、細部に  
 省略や相違が見られた。また、江戸期の写本には、南  
 蛮人らしき黒人の姿なども描かれ、当時の風俗をしの  
 ばせ面白かった。

第2日目は、阿部泰郎教授による「文観著作聖教の  
 再発見——「三尊合行法」関係聖教資料について  
 ——」と題された講演が行われた。現在進行中の大須  
 の真福寺大須文庫所蔵の調査を通し、今までほとんど  
 知られていなかった真言僧文観の核となる思想が明ら  
 かになってきたことを報告された。その思想の核にあ  
 るものが、「三尊合行法」という密教修法であり、本  
 尊の分身として脇寺の二尊を設定し、三尊を併せて修  
 法することにより、二元的な次元を超越し、不二を止  
 揚した“三位一体”の究極的な儀礼化であるとする。  
 発表では、同時に、文書に残された図像も紹介され、  
 「一仏二明王」（舍利＝宝珠、不動明王、愛染明王）の  
 様子がよくわかった。特に、三尊合行本尊が厨子とな  
 り、厨子の扉を閉めると三尊が融合し、一体となると  
 という仕組みに大変驚いた。この表現については、のち  
 に Dr. Dolce がコメントしたように、三位一体という  
 意味の trinity の訳語が妥当であると、私自身も感じ  
 た。密教的な修法ということで、修験や山伏の儀礼と



SOAS のブルネイギャラリーで、SOAS 所蔵の貴重な収  
 蔵品を拝観した。（中央の赤いスーツの女性が Dr. Dolce）

も関連するということ、確かに山岳信仰にお  
 ける修法や曼陀羅、石碑などの図像にもつながるよ  
 うな部分があつた。その意味でも、非常に示唆  
 的で、私自身の今後の研究課題も見いだせた大変意義  
 深い講演であった。また、阿部先生のご講演を受け  
 て、コメンテータを務められた、（SOAS で3カ月の  
 集中講義を行っておられた）彌永先生、Dr. Dolce か  
 らのコメントも非常に勉強になった。

## 2. オクスフォード大学ボドリアン図書館 附属日本研究図書館 資料閲覧

19日にはオクスフォードへ移動し、まず本館で関  
 覧の手続きを行った。名古屋大学から発行してもらっ  
 た閲覧の推薦状を持参し、一人一人が個別にインタ  
 ビューを受け、「本を汚損しない」などの旨が書かれ  
 た誓約書を読み上げさせられた。その上で写真付きの  
 閲覧可能 ID カードが発行された。たった半日の図書  
 閲覧にこれだけの手続きを要することに、イギリスに  
 おいて、図書館がどのような場所であり、本がどのよ  
 うに扱われているかがよくわかった。ただ、司書の方  
 々はどの方もたいへん親切で、本当に“学びたい”  
 という気持ちで訪問している者に対しては、正規の手  
 続きさえふめば、非常に「開かれている」と感じた。  
 実際、ボドリアン図書館の本は、閲覧の目的さえはっ  
 きりしていれば、研究者だけでなく、あらゆる人に平  
 等に開かれているということであった。

本館から、附属日本研究図書館へ移動し、司書で館  
 長でもあるイズミ・タイトラー氏から、所蔵の稀少文  
 献のいくつかを見せて頂いた。まずは、浄土真宗大谷  
 派の学僧であり、オクスフォード大学のマックス・



オックスフォード大学ボドリアン図書館 附属日本研究図書館

ミューラーのもとで学んだ南条文雄（1849-1927）自筆のノートを拝見させて頂いた。非常に丁寧な文字で几帳面に、阿弥陀経系の仏典が英訳されていた。また、インドの細密画で描かれたカードが2枚ほどはさまれ、当時の南条の息づかいが感じられるような気がした。また、いくつかの奈良絵本も拝見させて頂いた。その1つが『しゃかの本地』であり、皆で検証しながら拝見したところ、台紙に張り替える時に話の順序に異動があったりした。また、不明の奈良絵本としてタイトラー氏から提示された本については、同行した者で検証した結果、おそらく『大仏の御縁起』ではないかということになった。また、最後には、徳川家康から東インド会社に宛てた渡航交易許可の朱印状（慶長拾八年）をお見せ頂き、これは、日本には1つも残っていないということであった。家康の印章が押され、見たときは身震いがした。タイトラー氏によると、この筆は、天台僧で家康の信任厚かった天海のものではないかという。

タイトラー氏は、1979年ごろ渡英し、それ以来長年イギリスで司書を務められ、この日本研究図書館の三代目の館長であるということだった。今後もぜひ大いに、日本の研究者にこの図書館を活用して頂きたいと話されていた。

また、このタイトラー氏とは、この後のアイルランド・ダブリンでの奈良絵本・絵巻国際研究集会でもお会いすることとなる。

### 3. アイルランド・ダブリン チェスター・ビーティ・ライブラリ Chester Beatty Library 奈良絵本・絵巻国際会議 参加

イギリス・オックスフォードから電車で揺られ、西端

のホーリーヘッドまで行き、そこからフェリーに乗り、ダブリン港まで向かった。その航海中には、大阪大学非常勤講師の米田真理子さんによる宗教文学から奈良絵本への転換に関する発表が行われた。日本で最初に悟りを開いた女性とされる檀林皇后に次いで悟りに至った千代野という下女に関する記述について、奈良絵本を紹介しながら発表され、大変興味深かった。

チェスター・ビーティ・ライブラリは、1956年にチェスター・ビーティ氏がアイルランドに寄贈した図書館で、2000年にダブリン城脇にある庭に移転した。中東・東洋から集められた2万点以上の美術品があり、今回取り上げられた奈良絵本・絵巻以外にも、コーランの写本など大変貴重な美術品が数多く収蔵されているとのことである。今回は、このチェスター・ビーティ・ライブラリで1968年から学芸員を務め、1978年の第一回の「奈良絵本国際会議」の開催から中心的な働きをされている潮田淑子氏の案内で館内閲覧をし、その後、2日間の日程で、シンポジウム、研究発表が行われた。所蔵本をめぐる研究過程や慶応義塾大学による奈良絵本・絵巻のデジタル化プロジェクトについての詳細な報告などがなされた。また、初日の最後には、前出のボドリアン図書館附属日本研究図書館の館長イズミ・タイトラー氏より、貴図書館が所蔵する25点の奈良絵本・絵巻が映像とともに紹介された。その中には、我々が訪問した際に題名が明らかになった『大仏の御縁起』が紹介された。

また、この国際会議中に、ダブリンの伝統校であるトリニティー・カレッジの図書館内の展示室に展覧されている『ケルズの書』を拝観した。『ケルズの書』とは、ケルト芸術・アイルランド芸術の最高峰とされる、8-9世紀の豪華な装飾を施した4つの福音書のことである。トリニティー・カレッジには300年以上保



イズミ・タイトラー氏の発表



管されているという。各ページにケルト文様の特徴を強く残した渦紋やS字流線文、人頭動物像などが描かれている。実物を前にした我々は一様に感動で立ちつくしてしまったほど美しく素晴らしいものであった。展示室には、装飾写本作成の工程を実際に再現したVTRや、革をなめし、貼る、という製本過程を紹介した映像なども見ることができた。また、上階に上がると、「ロングルーム」と言われる長さ65mの蔵書庫があり、図書館の中で最も古いとされる20万冊の書籍が、天井ギリギリまでに納められていて圧巻であった（写真撮影は不可）。



戦死者の名前の書いてある石碑

#### 4. 中世宗教遺跡・遺構の实地調査

今回は、国際会議の前後に、キルケニーとキャッシュェルという2つの中世都市の遺跡・遺構を实地調査した。まず、キルケニーでは、12世紀に建てられた古城であるキルケニー城を見学する予定であったが、Good Friday という宗教的な祝日のために内部は残念ながら見学できなかった。しかしながら、まわりに広がる数々のCathedral（大聖堂）をくまなく訪問し、聖堂敷地内に点在する石碑や墓碑などをくまなく調べてまわった。私個人としても御嶽信仰における霊神碑（霊神を祀った石碑）の悉皆調査研究に近年取り組んでいるため、アイルランドの石碑・墓碑文化がどのようなものなのか非常に関心があった。キルケニーでは、キルケニーという町の名前の語源にもなった「聖カニス大聖堂」（St. Canice's Cathedral）の入口の両面に、第一次世界大戦と第二次世界大戦による戦死者の石板のモニュメントがあり、まるで日本の戦没者供養碑のようなものにも重なった。また、各大聖堂の裏庭には必ず墓地が配され、そこには多くのケルト十字の

石碑の十字架が建てられている。こうして墓地に、ケルト独自の渦巻き文様や聖書の物語が彫刻されたケルト十字を建てるのは、日本で墓地に石塔などを建てることも非常に似ており、大変興味深かった。また、その十字架の一つ一つが異なったデザインをもっており、それらを一つずつ丹念に見ていけば大変面白いと思った。当初キルケニーでは、Good Friday（祝日）であることを残念に思ったが、年に何度もないこうした宗教的な日に立ち会えたことはある意味幸運だったのかもしれない。特に、午後からのミサに続々と集まる地元の信者たちの祈りに向ける真摯な姿を拝見できたということは、大変貴重な経験であったと思う。

また、中世マンスター州の政治的中心地であったキャッシュェルでは、まず、町の最大の見どころでもあるロック・オブ・キャッシュェルを見学した。高さ90mの石灰岩の上に立つ要塞であり、5世紀からマンスター州の王オブライアンが居住したとされる。1101年に権限が教会に移り、1647年にカトリック教徒の迫害をおこなったクロムウェルが侵攻するまで、宗教の中心として栄えた場所である。敷地内には、城のほかにも高い塔や教会などが配され、荘厳な姿である。内部や裏手には同じく墓場があり、内部のものは、歴代の主のものであるという。また裏手の墓地には、大きなケルト十字がいくつも並び、圧巻である。特に、私自身の関心を引いたのは、墓の中に近年作られたと思しき新しい墓があったことである。近くの住民に尋ねてみると、同地区の中から「地元の人間だからどうしてもそこに眠りたい」という声が多数寄せられ、その中で特に12人だけが選ばれて埋葬することを許されたが、現在はもう中止されている。ただ、下が固い石灰岩ということもあり、埋葬した後、しばらくしては新たに土を盛りなおすという作業を数回繰り返さな



聖カニス大聖堂の墓地



ロック・オブ・キャッセル



内部の歴代主の墓



裏手の墓 ケルト十字が立ち並ぶ

くてはならないということで、親族はかなり大変であるということである。

## ま と め

今回は、ロンドン大学の SOAS での日本宗教のワークショップに先立ち訪れた大英図書館 (British

Library) での「大職冠」絵巻の閲覧に始まり、大学はもちろんのこと、さまざまな研究機関、図書館、都市で、人文学フィールドワーカー養成プログラムにまさにふさわしい研修が遂行できたと思う。自分自身が海外で研究発表するという機会に恵まれたことだけでも大変幸運であるが、さらにそれ以上に普段絶対に目にするのできない稀少資料をたくさん閲覧できたことは、本当に幸運であった。このような機会を与えて下さった、阿部先生をはじめ、名古屋大学のイニシアティブ事務局に対しては感謝の気持ちでいっぱいである。7月に名古屋大学で開催予定のグローバル COE プログラムの国際研究集会にはロンドン大学 SOAS の Dr. Dolce も来日されるということである。今回の研修での成果は、次の研究集会にもつながる大変価値あるものであったと思う。

## 註

1) 巻末添付ポスター参照。



SOAS CENTRE FOR THE STUDY OF JAPANESE RELIGIONS

SPRING INTERNATIONAL WORKSHOP

MONDAY, MARCH 17, 13:00- 19:00, RM 116

POSTGRADUATE WORKSHOP

RESEARCHING JAPANESE  
RELIGIONS:  
NEW FINDINGS FROM  
FIELDWORK AND ARCHIVES

CHAIRS: Abe Yasurô and Lucia Dolce

PANEL ONE 13:00-15:00

Kobayashi Naoko (Nagoya University)  
**The Oza ritual of the Ontake Practitioners**

Tullio Lobetti (SOAS)  
**Heaven among us? The Social Relevance of  
Asceticism in Contemporary Japan**

Satomi Horiuchi (SOAS)  
**Expressing Emotions: Memorial Services in  
Japanese Christianity**

COMMENTS AND DISCUSSION

COFFEE BREAK 15:00-15:30

PANEL TWO 15:30-17:00

Miyoshi Toshinori (Nagoya University)  
**Buddhist History as Sectarian Discourse:  
Historical Manuscripts from the Shinpukuji  
Archives**

Shinya Mano (SOAS)  
**The Influence of Kakuban's Doctrines on  
Yôsai's thought: Visualising the Five Organs  
and the Role of Amitayus**

COMMENTS AND DISCUSSION

PANEL THREE 17:30-19:00

Conan Carey (Stanford University)  
**The Tale of the Heike as Folklore:  
The Tale of Jishinbou Son'e**

Kigen-san Licha (SOAS)  
**Secrecy and Power in Medieval Soto Zen**

COMMENTS AND DISCUSSION

On March 17-18, 2008 a Postgraduate Workshop on Japanese Religions will take place at SOAS, followed by a Special Seminar held by Professor Abe Yasurô (Nagoya University). This event is jointly sponsored by Nagoya University Graduate Course In Comparative Culture and the SOAS Centre for the Study of Japanese Religions (CSJR). It will be of interest to students of Japanese religions, history and literature and to Buddhologists.

TUESDAY, MARCH 18, 10:00-12:30, RM 116

SPECIAL SEMINAR

RE-DISCOVERING MEDIEVAL  
JAPANESE TANTRISM:  
TWO NEWLY-FOUND WORKS BY  
MONKAN GUSHIN AND THEIR  
CONTEXT

Professor Abe Yasuro  
(Nagoya University)

Discussants:  
Iyanaga Nobumi (BDK Visiting Professor, SOAS)  
Lucia Dolce (SOAS)

For further information on this event please  
contact: Dr Lucia Dolce, ld16@soas.ac.uk

